

## ●中島かずき

僕は、今回の五作の中では河野さんの『義務ナジウム』が一番刺激的だった。

明治以前の日本の村落が持っていた「夜這い」などのある種「一夫一妻制」とは異なる性的な風習に関して、民俗学的な知識は持っていたが、「現在の日本でも閉鎖的な村落でこの風習が生きていたら」という視点で物語を書く発想はなかった。

現代人の感覚ではタブーだが、村に生きる者としては守らなければならない伝統である。その狭間に悩みながらも、しかし今の我々は高度成長期のように、過去の風習＝捨て去るべき悪と思っているわけではない。

今、いろいろな意味で閉塞感を感じ、過去と未来の狭間で進むべき道を選びあぐねている日本人の縮図として、かなり刺激的な物語が書けるアイディアだと、書き手としての自分が大いに刺激されたのだ。

残念ながら、河野さんの作品は、この素晴らしい着想が後半ぶれてしまい、作品としてはまとまりにかけものになってしまった。

そのため、僕としても大賞まで推せなかったのは残念だ。次の作品に期待したい。

高場さんの『先生とチュウ』は、血肉の通った人間の会話という意味で、登場人物の存在感が一番際立っていた。だが、問題提起ばかりでその先に進んでいない感じがしてもどかしかった。この作品が、高校演劇の大会に発表されたものだということが関係しているのか、作者が自ら決めた枠の中で物語を収めようとしている印象がある。そこがなんとも、もどかしかった。

川口さんの『ボスはイエスマン』は、人物の出し入れのテクニックや細かいギャグの入れ方など、目の前にいるお客さんを楽しませる技術に関しては、相当の力がある。舞台を見ればそれなりに楽しいのだろう。ただ、作家の技巧的な思惑が先に立ってしまい小手先のエンターテインメントに終わってしまうのがもったいない。この作者は前回でも最終選考に残っているが、前回よりも粗が目立っているのも気になるところだ。

『闇に朱、あるいは蛍』は、登場人物の情感を丁寧に描こうという意志は見えるが、それがみんなステレオタイプであるのが気になる。作者ならではの観察眼、心理描写などが欲しかった。

『踊り場にて、』も、不条理な設定ながら、その設定を理屈で説明してしまいイメージが広がらなかった。

前回に比べると、第二回の作品はどれも小粒なのは否めなかった。

なんとか毎回大賞を出したいのだが、だからといってその域に達していないものに上げるわけにもいかない。審査員間でも大いに論議したが、結果的に河野さんを佳作にするということで落ち着いた。

今回は、前回よりもメ切が早かったことなども影響しているのかもしれないが、次回はぜひ力作を期待したい。審査員側は大賞を出す気満々なので。

## ●古城十忍

大賞に推したい作品が見あたらない寂しさを抱えたまま最終選考会に臨んだ。それでも敢えて1本を選ぶとすれば、消去法ではあるが『義務ナジウム』を推そうと思っていた。

14歳の男女に大人たちが初めての性の手ほどきをする「オコモリ」という風習の残る村、という発想にまず意表を突かれた。閉じた田舎町に時代の波が押し寄せることによって風習に縛られた人々の価値観がぐらぐらと揺らぎ始める様を描いた本作には、全編にねっとりとした手触りがある。ただ、跡継ぎをもうけるために夫以外との性交渉をしなければならないという風習まで加えたことで、世界観の軸が大きくブレた。「オコモリ」だけで押し通せば、恐ろしく濃密な世界を描くことに成功したのではないか。それが惜しい。

選考会の大勢が早い段階で「大賞の該当作なし」に傾いたので、佳作を出すかどうか議論は移ったが、これには『義務ナジウム』を積極的に推した。

佳作には『闇に朱、あるいは蛍』を推す声も強かったが、展開が最初から最後まで平板な一直線、登場人物も一面的であるため、何の引っかかりもなく喉元をつりと過ぎていくようで私には物足りなかった。ひとえに感情が単純化されすぎているからではないか。ただ、この作者の持つ叙情性には惹かれるものがあるのは確か。

佳作2本ということであれば、将来性を買う意味で『ボスがイエスマン』を二番目に推そうと思った。ワンシチュエーションでどれだけの展開ができるか格闘した跡が随所に窺えて並々ならぬ筆力を感じたからだ。だが、いかんせん立ち現れる作品世界があまりに小さい。小さいというのはつまり現代社会にコミットしていく姿勢が乏しいということで、観客の求めるまま表層的な笑いを積み重ねただけでは、あつという間に戯曲は消費されてしまう。私としては受賞作には「消費されてしまわない何か」を求めたい。

『先生とチュウ』は人物造形に確かな視点があるものの全体的に小粒な印象は拭えず、習作の域にとどまっていると思えた。『踊り場にて、』は死後の世界に向かう途中の場所だということがすぐにわかってしまい、そのせいで展開が一気に底の浅いものになってしまった。つまり、作家の企みとしての設定の詰めが甘いと思われる。

## ●横内謙介

『義務ナジウム』は大傑作になり損ねた佳作であった。着想と細部の描写は抜群に面白いが、共同体が密かに守り続けている通過儀礼の描き方に厳密さが欠けたため、ポルノや怪奇モノのようなテイストが際立ってしまった。それも面白さではあると思うが、やり方次第では、現代社会や人間関係を神話的尺度で問い直すような作品になったのではないかと思われ、あまりに惜しい。このままでは、未成年者に性行為を強制するという儀礼の遂行が、多くの誤解を生んでしまうだろう。更に推敲を重ね、追いつける価値のあるテーマだと思う。作者の今後に期待したい。

個人的には『先生とチュウ』の人物のしたたかなリアリティと、さりげないが忘れられない大切な時間を鮮やかに切り取った手腕に佳作の票を投じた。主人公の浅野先生にもう少し動きがあれば、もっと強く推せたのに残念だ。女3人の登場人物がこの舞台では自然に生きているのに対して、肝心の先生が芝居の中で記号化しているように思われた。高校演劇用にまとめなくてはならない限界だったかもしれない。

昨年も候補になった『ボスがイエスマン』の作者・川口大樹さんは安定した力を発揮している。ただしこういう徹底したエンタテインメント作品で、戯曲賞をとるのはよほど傑出したテーマ（ネタともいう）を見つけ出さなくてはならない。この人の場合、それよりも観客の笑いと拍手が大事だとは思いますが、未来のある人だと思うので、ぜひ諦めずに自分だけの宝探しを続けて欲しい。

『踊り場にて、』は抽象と具体の境界が曖昧なのが魅力でもあり、欠点でもあると感じた。作者は人の別れと出会いに、強い関心があると思う。それをもっと鮮明に描き出せるスタイルがあるのではないだろうか。

『闇に朱、あるいは蛍』の作者は、描きたいことがはっきりしていて、そこが伝わればたぶん人の胸を打つと思う。しかしこの作品では、その思いに比して、人物と出来事の描写が追いついていないと思う。継続して書き続けることで、その力を磨いて欲しい。出来れば正賞を出したかったが、昨年のレベルに比して全体的にパワーダウンの印象は否めず、この賞の未来のために、敢えて佳作一編とした。

個人的には、今年用意した賞金の残りをキャリアオーバーして上積みし、次回応募者の励みにして欲しいと願う。

## ●松田正隆

私は「闇に朱、あるいは蛍」を推した。せりふがいちばんおもしろかった。母とふたり暮らしで、霊園で働いているという主人公の男の設定からしても、世界の行き止まりのような場所で、どこにも行けないことがわかっているながら、旅愁を誘うものをただ眺めているしかない人々のことが描かれていたようにも思う。地方の行き場のなさ、みたいなものも感じたが、それよりももっと、そのことは普遍性のあることなのかもしれない。つまり、どんなに平凡な生活をおくっていても人の気持ちに「なみかぜ」が立つということもときにはあるわけで、そんな「なみかぜ」くらいのことで当人の人生は大きくはゆらがないけれど、現に人の人生なんてものはその「なみかぜ」のくりかえしでできており、けっこうそれがボディブローのように効くってこともあるし、それが結局命取りになる。人間のそんな「なみかぜ」への対処の仕方が劇になるということを島田さんは描いた。幕切れで、紅美が帆船祭りに行きたいのではないかということをもめんどくさげに母に告げる夏生の絶望。去年もそうだったし来年もそのような場面はやってくるのかもしれないし、それは一度限りのことなのかもしれない。その貧弱なかけがえのなさはどうしようもなく付き合わざるを得ないと確信したかのごとく夏生は嗚咽する。私はなぜかフェリーニの「道」のラスト、波際のザンパノの号泣を思い起こした。

去年の「春、夜中の暗号」にも感じたが、おそらくこのような戯曲は東京や関西からは生まれて来ない。一見地味だけど、味わい深い、珠玉の作品が日本各地でいくつも生まれているのではないだろうか。

## ●岩崎正裕

本年度の九州戯曲賞は佳作に河野ミチユキさんの「義務ナジウム」、大賞は該当作なしという結果になった。異存はなかった。

「義務ナジウム」は閉ざされた町の、現代まで残る風習に焦点を当てて書かれている。登場人物たちの配置や古めかしい役名、地域語による台詞も効果的で、因習「オコモリ」が残る町の様子を過不足なく浮かびあがらせている。オコモリとは、14歳になった者への大人による性の手ほどきを指す。しかし、トンネルの開通工事が進められており、町興しも盛んな現代のこの町に、こういった風習が今まで残る必然があっただろうか。戦前ならいざ知らずである。構築された世界観は作者の願望の発露ではないか、との疑問が拭えず、私は生理的に劇への入り口探しを諦めるしかなかった。

その点で、島田佳代さんの「闇に朱、あるいは蛍」にほっとさせられた。港町に設定されたコミュニティは、亡くなった者を悼んで揺れる。地域で演劇が始まることを期待するなら、等身大のテキストが必要だろう。島田さんの葛藤に可能性を感じる。

高場光春さん「先生とチュウ」生きる力に溢れたウェルメイドプレイ。高校生に観せるために書かれて成功している。

川口大樹さん「ボスがイエスマン」たくさんの登場人物を書き分ける手腕は圧倒的。自明性に頼らず、解説不能な物へ手を伸ばし、あと一步の飛躍を。

高橋克昌さん「踊り場にて、」劇によって涉猟するフィールドが自己完結気味。風が吹かない世界は冷たい。予め想定された世界を踏み外す覚悟を。

九州戯曲賞で読める最終候補作品には、それぞれの手触りや息づかいがあるように思われた。応募作全体で、読む機会に恵まれなかった他の作品にも、きっとそれぞれの手触りがあったのだろう。劇作を志す者は、ただ書き続けるしかない。まだ応募したことがない劇作家諸氏には、ひとつの顕彰の機会と捉え九州戯曲賞に挑まれてはいかがだろうか。より一層、応募作が増えることを祈ります。